

研究会報告

タイトル 「スポーツ振興政策とソーシャル・キャピタル
-地域スポーツ実践者の視点から-

発表者 : 飯田義明 (研究員)

現代社会におけるひとつのキーワードとなっている言葉のなかに「ソーシャル・キャピタル (Social Capital)」という概念がある。この概念は、Robert D. Putnam が 2000 年に発表した“Bowling Alone” (孤独なボウリング - 米国コミュニティの崩壊と再生: 2006) によって注目されるようになり、一般的に「一般的信頼」「規範=互酬性」「ネットワーク (人々の繋がり)」と定義されている。そして 2000 年以降、様々な研究分野でこの概念を導入した研究が増加している。その背景には、コミュニティにおいて人々の繋がりが希薄になっていることがある。そこで、今研究会では (1) 「ソーシャル・キャピタル」がスポーツ分野 (特にスポーツ振興政策) においてどのように研究対象として導入されてきたかを歴史的に検討し、(2) 地域スポーツの実践者に「ソーシャル・キャピタル」がどのような影響を与えているのかをフィールドワークから考察することを目的とした。

まず、個人の趣向から始まったスポーツが国家統合のボンドとしての役割を担わされた戦前、そして戦後の健康政策と絡みつつ、スポーツが諸種の社会問題を改善し、地域の活性化を後押しする政策として「ソーシャル・キャピタルとスポーツ」が結び付けられ、クローズアップされてきている現状を明らかにした。その後、地域スポーツの健康体操教室に長い年月実践・参加することによって、どのような繋がりが形成されてきたかをフィールドワークから以下の三点、(1) 社会参画意識の醸成 (2) 高齢者にとっての生きがいの場所 (3) 社会的な承認の場所、としての効果があることを明らかにした。

その一方、近年推進されている総合型地域スポーツクラブ政策の関係で、旧スポーツクラブ (単一) との軋轢により、歴史的に醸成されてきた関係性の分断される可能性。また、健康政策 (予算的問題) の変容による健常者の予防医療からの排除などの問題が新たに立ち上がっていることが、行政関係者の聞き取り調査から浮かび上がってきた。